

H7.33

木製トラ像（ナーナイ）

A. P. ドンカーン作 長さ38.4cm 幅4.4cm 高さ7.0cm

講習会	ムックリを鳴らそう	2
講座	ロシア極東経済と先住民の社会・経済	3
講座	ウイルタの歴史と樺太時代の映像上映	4
表紙・記事・お知らせ		5
ニュース		6

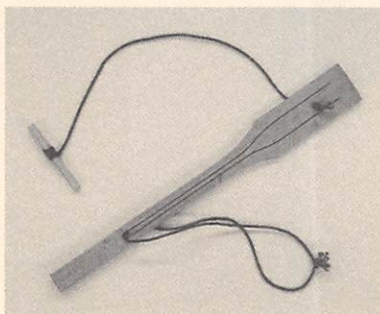
ムックリを鳴らそう

講師 西田正男氏・床 明 氏(阿寒アイヌ工芸協同組合)

平成14年4月13日(土) 14:00-15:30 当館講堂

アイヌの「ムックリ」は、世界中でみられる「^こ口^{きん}琴」と呼ばれる楽器の一種です。口琴は、枠の間の振動弁を弾いて振動させ、その音を演奏者の口のなかで共鳴させて演奏します。ムックリは、糸を引っぱることによって弁を振動させるタイプの口琴で、現在でも北海道内の観光地で土産として販売されています。

もともとは儀礼などの際に演奏されたものですが、愛情表現にももちいられたようです。



ムックリを奏するにはちょっとしたコツがあり、初めての人の場合、なかなか音を出せないこともあります。

当館では、阿寒アイヌ工芸協同組合の西田正男氏、床明氏を講師に招き、ムックリの製作と演奏を体験する講習会を実施しました。次にその概要を紹介します。

* * *

まず、映像資料で熟練した演奏者によるムックリや金属製口琴の演奏を視聴した。

(使用映像資料 日本ビクター『音と映像による新世界民族音楽体系1 日本』より、北海道アイヌのムックリの演奏、同じく『2 北方アジア・朝鮮半島』より、サハの金属製口琴「ホムス」の演奏)

その後、実際にムックリの製作をおこなった。材料は、長さ15cm、幅2cm、厚さ0.2cm程度の細長い板状に切られた竹、^{たこ}脈糸、長さ3cmほどの竹ヒゴである。竹の板には、すでに本体と弁となる部分を区切る切り込みが入れられ、脈糸をとおす穴が^{うが}穿たれている。

まず、切り出しナイフで、板の長辺、全体の2/3ほどを削って幅を狭める。ここが唇に当たる部分になる。

次に弁の付け根部分を彫刻刀で彫り込み、板の厚みを本体の半分程度にする。

そして本体と弁の付け根部分の穴に脈糸を通す。本体の糸は輪にして結び、弁付け根部分の糸の端には竹ヒゴを結びつける。

これでひとまずムックリの完成である。

形ができたなら、実際に竹ヒゴをつけた方の脈糸を引っ張り、弁を振動させてみる。糸を引く強さやタイミングが重要である。また、弁の付け根部分が厚すぎるとうまく振動しないので、必要に応じて再度削る。

弁が振動するようになったら、本体を唇に当て、輪になった糸に小指を通して親指・人差し指・中指の3本でムックリの端を持ち、頬に固定して実際に演奏してみる。

弁の音を口のなかで共鳴させられるようになったら、喉の奥を大きく開いたり、舌の位置を変えたりして音を変化させる。

* * *

今回は時間の制約もあり、実際にいろいろな音を出す技術を習得するまでには至りませんでした。が、参加者の皆さんは自分で作ったムックリに満足している様子でした。

(学芸課 中田 篤)



ロシア極東経済と先住民の社会・経済

講師 荒井信雄氏（札幌国際大学助教授）・渡部 裕（当館学芸課長）

平成14年7月6日（土）13:30-16:30 当館講堂

北方諸地域における人びとの経済や社会、文化は、その時々政治・経済体制の影響を受けてきました。北方地域では毛皮交易の浸透や植民地化、政治体制の変化が先住民の経済や社会のあり方に大きな影響を与えてきたことが知られています。とくにロシアではソビエト連邦成立にともなう社会主義経済時代を経て、1990年代初めの市場経済への移行と、政治・経済体制が大きく変化しました。現状ではこうした変化と先住民の文化・生活との関係については必ずしもあきらかではありません。今回の講座では、ロシア極東に焦点を絞り、前半の荒井信雄氏の講演では、帝政時代からソビエト時代そして市場経済移行期の経済的特徴、とくに漁業の変化について報告をいただきました。さらに、当館の渡部から、こうした変化にともなう影響についてカムチャツカ半島の先住民社会の事例が報告されました。以下にその概要を報告します。

■荒井信雄氏「ロシア極東水域における漁業—水産資源の管理・利用・加工・流通—の特徴」

ロシア極東における漁業の対象魚種、漁業構造とその歴史は、ヨーロッパ・ロシアと大きく異なってきた。西側では内水面漁業を主としてきたが、極東では海洋を主な漁場としてきた。19世紀末前後から始まった極東地域の商業的漁業は、日本人漁業者によって主導され、ソビエト体制の初期まで資本、市場、労働力等で日本に依存した体質をもってきた。1945年8月のソビエト対日参戦以降、極東の漁業は、それまでの国際性格を失い、大型漁船、洋上加工船の導入と漁場の遠洋化が進んだ。こうした漁業の近代化は、同時に、極東地域の産業構造を漁業に特化させるものであった。

しかし、現在に至るまでロシア総体として魚の消費量は小さく、人口の少ない極東域内では需要は少なかった。極東における水産加工品の大部分は、かつては国外へ輸出され、ソビエト体制以降には、国民への水産蛋白の摂取奨励政策の下で国内他地域へ移出されてきた。

過去も現在も漁業資源は国家が所有し、ソビエ

ト時代には国家の主導で資源配分、生産がなされ、国営企業等の間に競争は存在しなかった。市場経済への移行は企業の私有化、漁船等の経営主体の細分化をもたらし、シベリア鉄道等の輸送コストの高騰による国内販路の喪失から輸出用「外貨獲得魚種」への集中が生れた。また、国家の補助の打切りは経営コストをめぐって、特定漁場への集中や捕獲枠の獲得競争・紛争を激化させてきた。このように、ロシア極東の漁業はグローバル経済のなかで競争の多様化が生じており、国内外を問わず水産企業は新たな対応を迫られている。



■渡部裕「カムチャツカにおける先住民の社会・経済」

1907年調印の日露漁業協約の下で始まったカムチャツカにおける日本人のサケ漁業は、日本人漁業者と先住民との接触をもたらした。先住民はサケや毛皮を日本企業に販売し日本の物資を手に入れていた。また、漁業技術や漁業資材の提供をつうじて日本人と先住民は友好関係をもってきた。日本の漁場の労働者は北海道、青森、秋田など北日本の農漁村出身者で、限られた漁期のなかで厳しい労働に従った。こうした日本人は「よく歌い、笑い、働く日本人」と好ましい印象で捉えられていた。

ソビエト体制の確立とともに日本人漁業者と先住民との自由な接触は制限され、先住民は市場移行期まで集団農場（コルホーズ）（多くは後に国営農場〔ソホーズ〕に集約）に所属してきた。現在、企業の民営化のなかで、多くの先住民は失業し、伝統的なサケ漁を食料獲得の手段としている。

（学芸課 渡部 裕）

ウイルタの歴史と樺太時代の映像上映

笹倉 いる美 (当館学芸員)

平成14年6月23日(日) 10:00-11:30 当館講堂

当館が立地する網走は、ウイルタとの関係が深い地といえる。それは、日本領だった樺太から、戦後ウイルタの人びとが移住してきたという歴史をもつからだ。

では、なぜウイルタの人びとは、自分たちの故郷を離れ、網走[※]へ移住してくるようになったのだろうか。

樺太はサハリンともよばれる島で、講座では日本領を樺太、ソ連(ロシア)領をサハリンとした。

樺太(サハリン)は、ウイルタ、アイヌ、ニブフの人びとが暮らす地であった。17世紀末以降には、日本、中国、ロシアの三国が、各々の思惑をもって、樺太方面に進出するようになる。このため島の帰属問題(どの国の領土なのか)がおきたが、長い間決着しないままであった。もっともその交渉は先住民族には無関係にすすめられていた。

<<樺太に関する条約>>

1855(安政元)年 『日露通交条約』

樺太は日露共同領有に

1875(明治8)年 『樺太・千島交換条約』

樺太はロシア領、千島列島は日本領に

1905(明治38)年 『ポーツマス条約』

樺太の北緯50度以南が日本領に

こうしてポーツマス条約によって、はじめて樺太島上に国境がひかれることになる。これは、それまで島内を行き来してきたウイルタにとって、その自由を奪われることでもあったし、日本、あるいはロシアという国家に組み込まれることでもあった。

樺太の北緯50度以南、つまり日本領となった樺太では、敷香^{しすか}(現ポロナイスク)郊外につくられた集住地「オタスの杜^{もり}」にウイルタやニブフの多くが定住するようになる。この理由のひとつは学校(教育所)である。教育所では日本語教育が行われていた。また男性の多くが日本軍に徴用された。最後まで国籍を与えられることはなかったのだが、日本領時代に「日本人」という意識をもつことになる契機があった。

戦争末期にソ連軍が北緯50度線を越え、その後30万人ともいわれる日本人が樺太から引き揚げた。このとき、日本人という意識をもつウイルタが、同様に日本へ「引き揚げる」ということを選択することもあったのである。また、軍事に関わった男性たちは、戦後、シベリアの収容所へ入れられた。解放後、ソ連となったサハリンへ帰らず直接日本へ来た人たちもいる。そうしたうちの何家族かが、網走へ移住してきた。

* * *

オタスの杜は、多くの日本人が訪れる場所でもあり、なかには研究者も含まれていた。民俗学者として著名な宮本馨太郎氏は1938(昭和13)年にここを訪れ、そのときの様子を16mmフィルムに残している。

講座の後半にはこのフィルムをビデオテープに変換したものを上映した。

【上映映像】

『宮本馨太郎映像作品 オロッコ・ギリアーク^{※※}の生活』17分30秒 1938(昭和13)年撮影

[※]移住先は網走には限らず、北海道内、本州の例もある。移住者数について詳しいことはわかっていない。

^{※※}オロッコはウイルタを、ギリア(ヤ)ークはニブフをかつて呼んだ言葉。

(学芸課 笹倉 いる美)



今号の表紙 — 木製トラ像 —

ナーナイ、ウリチ、オロチが居住するアムール川中流域は、シベリアトラ（アムールトラ、マンシュウトラ、チョウセントラとも呼ばれる）の生息地にあたる。これらの民族集団にとって、トラはクマとともに恐るべき存在であり、また崇拝すべき存在であった。狩猟に行くときは、主に動物の体の一部である脚、爪、歯などを、身を守るために、またはその動物の力や勇気を授かるために携帯した。また、すべてのものに靈魂が存在するという「アニミズム」の信仰により作られた「靈魂の住処」としての動物の木偶は、動物の体の一部と同様な効果を与えてくれるものとされていた。

今号の表紙はA. P. ドンカーン氏が1995年に制作したトラの木偶（彫刻像）である。氏は「靈魂の住処」としての木偶を作る彫刻家であると同時に、ソ連の政権下において失われつつあったナーナイの物質文化の保存に携わる、アムール民族芸術博物館の館長でもある。

この資料（作品）は、実際にナーナイが狩猟時に使ったものではないが、氏がナーナイの伝統文化を後世に伝えようと制作した資料（作品）の一つである。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 4/2(火) 障害者対応拡充などの工事を終え、網走市立美術館がリニューアルオープン/D
- 4/2(火) 北海道ウタリ協会旭川支部がアイヌの伝統的ヒグマ猟を再開/D
- 4/22(月) 『アイヌ神謡集』編者、知里幸恵さんの記念館「銀の滴記念館(仮称)」を登別に建設へ/M
- 5/1(水) 東京大学総合研究博物館と常呂町が共催で「北の異界—古代オホーツクと氷民文化」展を開催/A
- 5/26(日) 4/13にリニューアルオープンした紋別市立博物館の入館者が1万人突破/D
- 6/13(木) 渡島管内森町の「鷲ノ木4」遺跡から、縄文時代後期中葉(約3500年前)の石垣状の遺構が出土/D(夕)
- 6/17(月) 石狩市の「紅葉山49号」遺跡で2つ目の木製舟形容器が出土/D(夕)
- 6/26(水) 網走市教育委員会がモヨロ貝塚の試掘調査を再開/A

※A:網走新聞 AS:朝日新聞 D:北海道新聞 Y:読売新聞 M:毎日新聞
複数紙掲載の場合は抜粋が大きい方を紹介しています。

第17回特別展

狩る
— 北の地に獣を追え —

アムール中流域から本州北部にいたる地域の狩猟文化をつうじて森林の資源利用のあり方を紹介します。

開催期間 2002年7月19日(金)～9月26日(木)
 開館時間 9:30～16:30
 休館日 月曜日(ただし9/16、9/23は開館) 9/17(火)、9/24(火)
 観覧料 一般300(240)円 高校生・大学生100(80)円
 小学生・中学生50(30)円 ()内は10名以上の団体料金



■寄贈資料 (4-6月)

・大分県の杉目昇氏から、オロ
チョンの手袋、ヘラジカ皮製上着、
乗馬ズボン各1点が寄贈されました。

■執筆者・出版社から贈呈
を受けた書籍等 (4-6月)

- ・杉目 昇 2000 『ホロンバイルあ
の頃コサックと共に』杉目 昇
- ・佐川正敏 2002 『百色旧石器—
中国広西色遺跡群発見のハンド
アックスの比較研究—』東北学
院大学文学部考古学 (佐川研究
室)
- ・崔 吉城 2002 『北東アジアに
おける日本植民地と民族移動に
関する文化人類学的な研究』文
部科学省科学研究費補助金研究
成果報告書
- ・正進社 2002 『歴史の資料』正
進社
- ・小島曠太郎／えがみとみこ 2002
『ラマレラ・生命の物語 クジ
ラがとれた日』ポプラ社
- ・山崎 達 2002 『小さな計算親方
—たかが電卓されど電卓—』山崎 達
2002 『網走の暦 星空 気象—
便利データブック—』山崎 達
- ・荻原眞子 2002 『ロシア・アイヌ
資料総合調査研究—極東博物館
のアイヌ資料を中心として—』
千葉大学文学部
- ・朝日新聞社 2002 『日本の歴史中
世1-3』朝日新聞社
- ・田村すず子 2002 『アイヌ語音
声の研究』文部科学省科学研究
費補助金研究成果報告書

■主な来館者 (4-6月)

4/8 (水)

東京大学大学院人文社会系研究科
教授 宇田川洋氏
助手 熊木俊朗氏

6/18 (金)

長野県立歴史館
考古資料課専門主事 水沢教子氏

■行事案内 (8-10月)

8/10 (土) 博物館クラブ「北方民
族の狩猟具作り」

8/11 (日) 講座「特別展「狩る—北
の地に獣を追い」解説」

8/24 (土) 講座「映画「デルス・
ウザーラ」にみる狩猟文化」

10/19 (土)・20 (日) 第17回北方
民族文化シンポジウム「北太
平洋沿岸の文化—資源利用の
あり方—」

10/29 (火)シンポジウム講演会「ア
イヌ文化への展望」

■その他の行事報告 (4-6月)

5/5 (日・祝) こども映写室

5/24 (金) 講習会「とんぼ玉づく
り」第1回

5/25 (土) 博物館クラブ「親子でつ
くるとんぼ玉」

5/26 (日) 講習会「とんぼ玉づく
り」第2回

■観覧者動向 (4-6月)

常設展示

4月 1,231

5月 1,817

6月 2,725

計 5,773 名

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集
中です。友の会では季刊誌「Arctic
Circle」や「友の会だより」をととし
て北の文化を紹介しています。年会
費は3000円です。すでに会員になら
れた方は、お知り合いの方にもご紹
介下さい。詳しくはお問い合わせを。



親子でつくとんぼ玉

前理事長 大林宏文氏 逝去



財団法人北方文化振興協会前理事
長の大林宏文氏は、かねてより病氣
療養中のところ、7月22日にご逝去
されました。

大林氏は、平成5年に財団法人北
方文化振興協会理事、平成7年に同
理事長に就任され、8年10ヶ月に渡
って当博物館・オホーツク公園の管
理運営と振興発展にご尽力されました。

ここに永年にわたるご厚誼を感謝し、
謹んでご冥福をお祈りいたします。